

私のワークアンドライフバランス

財団法人 乙卯研究所 山形 尚子

化学工学会の皆様こんにちは。私は薬学部出身ですが化学(合成)が専門で(平成3年)化学メーカーに就職したので、そのあたりでご参考になればと思います。今は医薬品の開発関係の仕事をしています。

薬学、合成の就職

薬学の合成出身者は、大抵大手製薬メーカーの合成部門に就職するのが一般的だと思う。しかし当時は、女性に関しては、ようやく一年上の有機化学系の先輩が大手製薬の研究所に“初めて”女性の総合職で採用されたという時代であった。有機合成の仕事は、特に薬の場合には、ひたすら沢山の化合物を合成しても一生に一つヒットするか？という力仕事と言われており、女性には不利な感もあったし、そもそもそういうことがしたいか？という素朴な疑問もあり、違う業種の中で化学メーカーを選択した。周りからは「給料が安いのに何故」と言われたが・・・(製薬業界は給与が高めらしい)。

その化学メーカーにも製薬部門があったが「今年は女性は取らない」と言うことで、私は化成品やファインケミカルの合成の研究所に配属された。固体触媒、均一系触媒などを用い、新規で効率的な化成品の製造を目指して研究を行った。従来、石油化学は高度成長期の花形産業で、何万トンという量を大量製造する際、触媒などにより少しでも反応効率を上げれば莫大なお金となって返ってくるという産業であった。しかし私がいたころは、既に産業も成熟期に入り、多少効率を上げて、ナフサ価格の変動や、工場を人件費の安い海外に移した方がずっと効果的じゃないか、というようなジレンマもでてきて、研究テーマも「如何に」作るかから「何を」作るか、といった方向にシフトする必要のある時代だった。

企業研究の面白さは、このように社会や市場のニーズに合わせながら研究をお金(儲け)につなげてゆくところであるが、本当に儲けようとおもったら最先端のサイエンスを駆使して人の作れない商品を工夫するしかないわけで、研究的にも困難で面白い課題が沢山ある。「儲け」というと学生さんは顔をしかめるかもしれないが、売れる商品、即ち特に社会の役に立つ商品であるということである。企業であるからには「儲かりまっか」という気持ちで、手段としてサイエンスをどう駆使できるか、というゲーム感覚も必要なんじゃないかと思う。

企業研究のキャリアパス

研究にもこのようにサイエンス以外の視点も必要であり、企業研究者でずっと研究を続けられる人は田中耕一さんのような一握りの人で、大体は30代か40代に工場や管理部門の経験を積みながら昇進コースを上がってゆくものである。また、よく学生さんの入社面接をすると「ずっと研究をしたい」と言うのを聞くことも多いが、企業に入ったからには、研究以外の機能や会社がどう動いているかを知る、そのようなチャンスは企業人としては大切である。若いうちは、女性という差別を直接は感じない場合も、このような役職への転属、配置転換の時に、やはりガラスの天井がある企業が多いのではないかと私は思う。会社によっても時代によっても違うので、就職の際には、女性社員の割合・役職の女性の割合(年齢層情報とともに)を出してもらえば、これらの傾向はつかめるかと思う。

家庭と仕事・・・そして自己との両立

女性は結婚や出産をすると「家庭と仕事の両立」ということを言ったり言われたりする(男性は言われな
いんですよね・・・)。子どものために残業や出張を諦めたりせざるを得ないケースもあり、肩身の狭さを覚
えることもあるかもしれない。親族やベビーシッターを駆使したりして緊急時の体制を準備するのは子持
ち共働きのお約束、としても、子どもの急な発熱での呼び出しなど、どうしようもない時もある。「公私混同
しないのがプロ」と言うスーパーレディもおられるが、私は、子育ては「私」というよりはある程度は「公」で
あると思っている。子どもの健康と安全、および真っ当な人間に育てることについては親が(大げさに言
えば)国に対して社会的責任を持つわけで、例えばやむをえず子どもを一人で家に置いて事故でもあつ
たら親が小児虐待でしょつ引かれても仕方がない。会社には関係ないという向きもあろうが、企業も大き
ければそれなりに社会的な役割を担うべきものである。これまではこの「両立」は女性特有の課題かと思
われたが、最近では、上司のオジサマ達が老齢の親の介護のために早引けしたり休暇を取ったり苦勞さ
れている例も多く、今や育児・介護ともに社会全体で支える仕組みを作らなければ日本も個人も成り立
たない時代なのではないかと思う。ある程度は「仕方ないじゃん」と割り切って粛々と子育てをし、あまり自
分を責めたり頑張りすぎて体を壊したりしないように、という事なのだが・・。

フランクリン・コヴィー著の「7つの習慣」という本で、自分の人生の目標を考える上で、自分がどうい
う「役割」を持っているかを、会社人・子・母・妻・・・というように考え、それぞれの目標やバランスを考える
必要があるという事が書かれている。

私自身の家族の例で行くと父親が高度成長期の企業戦士で毎日深夜帰宅、母親が専業主婦という
当時の典型的な家庭であった。会社人という役割だけに専念してきた父も、定年退職すると、家族との
絆も強くもなく、他の役割となるものがないことに気付くという良くある話。母親も、子育て中は何か達成
感でもあるような気がしていたが、子供達が巣立つとやることもなく・・・。結局、自分の人生は自分で考
えるもので、会社や子供に依存していてもダメという事なのだと最近思う。仕事も大事だが、家庭も含めた
他の立場にも重要なものはある。また、実はそのほかに「自分」という柱をどう持つか、ということを知る
べきなのであろう。どれか一つ、ではなく、人間なら色々な役割を持つ中で、自分のテーマを仕事なり仕
事外なりで探しているのが多勢のサラリーマンなのかもしれない。

女性の場合特に、子供が幼い超多忙な時期は「仕事か家庭か？」と二者択一に考えがちになるが、
それも数年のことであるし、例えば子育てとか子供とか他人に自分の目標を置くのは、何か不自然だと
個人的には思うし、結局子供に歪が行く事も多いのではないかと思う。何だか子供嫌いかと誤解される
かもしれないが、私の場合子育ては「こんなに楽しい事が人生にあるのか！」という位楽しい経験である。
楽しいからこそ、それだけで満足したり依存したりしないようにと思い、私もすっかり自分の人生の柱を持
った上で、子供と人間対人間の関係を築き、また子供がそういう背中を見て育ってくれば良いなと思
っている。

山形 尚子

最終学歴: 東京大学大学院 薬学系研究科

現職: 財団法人 乙卯研究所 研究員